

話 題 (I)

ユーリッヒ核データ国際会議

「核データ国際会議」がユーリッヒ（ドイツ）で本年5月に開催された。会議の様子や印象を3名の方にまとめて頂いた。会議の報告は原子力学会誌 Vol. 33, No. 9 の「国際会議の窓」にも報告されているのでご覧きたい。（編集委員会）

会議での体験談

（九州大学総合理工学研究科）河野 俊彦

今年の5月13～17日にドイツのユーリッヒで開催された核データ国際会議に参加しましたが、その際の報告を核データニュースに執筆するよう電話で御依頼を受けた時は、かなり戸惑ってしまいました。何しろ私自身、研究者としては新米で、会議に参加すると言うよりは、世界的に名を知られた先生方から講義を受けている様な有り様でしたから、各セッションの内容について客観的に報告する事など到底出来そうになく、せいぜい見たままの様子を伝える程度だと思います。発表の中には、興味深く、紹介するに値するものが沢山有りましたが、いずれ論文集として出版されますので、従って、この拙文は会議の報告と言うよりは、私の国際会議体験談として書き進めました。

会議はユーリッヒの研究所(KFA)で行われ、出席者は300人以上、特にベレストロイカの進んだソ連からは23人の研究者が参加し、折にふれソ連の開かれた事に対する賛辞が聞かれました。ちなみに、モスクワより遙か遠い日本からの参加者は33名で、これには何の御言葉も無し。

会議出席者の宿泊地は主にアーヘンとデュレンに分かれており、そこから専用バスで研究所に向かう事になっていました。正直なところ、出発の直前までユーリッヒと言う町が何処にあるのか分からず（普通の地図には載っていない）、ただアーヘンの近くと言う事だけしか知りませんでしたので、翌朝から毎日数十分アウトバーンをとばすバスで「通勤」する事になるとは思ってもみませんでした。

会議は13日からでしたが、前日の夕方6時にアーヘンの町の中心部にある、「エリーゼンブルーネン」と言う名のレストランに集合して受付を済ませる事になっていました。受付には早速、最初のトラブルが待っていました。私は今年3月に長かった学生生活に終止符を打つと同時に、「5月にはドイツに連れて行ってあげるから」の言葉が功を成したのかどうかはともかく結婚したので、家内同伴での参加でした。会議出席者の同伴者の為にゲストプログラムがあり、私たちも参加を申し込んでいたのですが、手続き上の行き違い

があったようで、暫く学会側の秘書の一人ともめていました。その事はすぐに解決したのですが、その際、その秘書が私の書類を持って行った儘何処かに置き忘れてしまい、その事でまた暫くごたごたしてしまいました。私が高校生の時、英語の先生が「英語で喧嘩が出来れば、一人前」と言っていました。これで自分も半人前ぐらいになったかなと内心思いましたが、本当に疲れてしまいました。ちなみにその先生が言うには、「英語で女性を口説く事が出来れば、完べき」だそうです。

研究所行きのバスは数ヶ所から出ていて、自分の宿泊しているホテルに最寄りの集合場所から乗車すれば良い事になっていました。私たちが宿泊していたのは、先のエリーゼンブルーネンからすぐの所で、同じ九大の石橋先生夫妻や原研の中原さん夫妻と同宿でしたので、私たちは、毎朝8:20にエリーゼンブルーネンからのバスに乗車していました。初日のバスでは、ORNLのC. Y. Fu氏と隣り合わせ、私が学生のような服装をしていた為かどうかは分かりませんが（実際、私はジャケットにジーンズという姿だった）、ゆっくりとした英語で気さくに話しかけてくれ、私のたどたどしい英語を辛抱強く聞き取ってくれました。そこで話した内容と言え、私たち日本人はLとRの区別に苦労するとか、中国語を話す者にとって難しいのは何だとかで、特に研究に関係するものではありませんでしたが、この様な機会に色々な人と知り合いになれるのは幸運した。その後のポスターセッションでは、その人を知っている事でかなり安心して色々尋ねる事が出来たのですから。

会議会場は研究所内にある池の湖畔に建つ綺麗な講堂で、大きなガラス越しに池の向こう岸のカフェテリアが見えます。研究所の敷地自体が森林と言える程、自然環境に恵まれた所で、芝生の間から小さな花が顔をのぞかせていました。ただ、この花は余り歓迎されないようで、相当に芝刈機の犠牲になっていました。午前中は招待講演中心の為、最終日以外はこの主会場である講堂だけで会議が進行しますが、同時進行のセッションを聞くためには他の建物に移動しなければなりません。しかし、建物から外に出るのが少し厄介で、それは別に研究所内を自由に移動出来ないと言う訳ではなく、理由はそこでの天気です。朝、晴れていても暫くすると次第に雲が広がり、雨が降り出す、暫くするとまた晴れてくる、というのが日に2、3度繰り返されるので、安心して移動できません。まあ、雨と言っても大した事は無く、傘無しで走って行ける程度でしたが。

初日は、S. M. Qaim氏を初めとする KFAの挨拶に始まり、幾つかの招待講演の後に1時少し前の遅い昼食でした。KFAは、研究所でありながら多くの学生がいて、その学生達でカフェテリアが混雑するのを避けて時間を遅らせている様でしたが、学生達の去った後ではメニューの内幾つか無くなっている物もあり、食事の選択権はあまり有りません。本来なら自分の選んだ料理の分だけお金を払うのですが、会議参加者は予め8 DM分の食券を渡されており、どれだけ食べてもその券一枚だけで良い事になっていましたが、大体に於いて一皿の分量が多く、毎日何となく損をしている気分でした。

初日午後のセッションは、核分裂・共鳴パラメータ等と、装置・測定技術に関するもの、及び今回の会議の一つの特色であるTutorial Lectures(TL)の3つに分かれて行われました。私はD.L.Smith氏のTLを聞こうと思いその会場に行ったのですが、比較的小さい部屋に大勢の人達が聞きにきて居り、会場にすら入れない程の賑わいで、結局、元の会場に戻ってしまいました。この様な、セッションが本来研究成果の発表の場である会議の主旨に沿ったものかどうかは分かりませんが(どちらかと言うと、学生に対する臨時の招待講演に近かったと思う)、核データの分野の中でも自分自身とは余り関連の無い内容についての概要を知る良い機会であるとは思いますが。

セッションの形態は、先のTLの他、Invited Talk(IT)とOral(O)、そしてポスターセッション(P)に分かれています。ポスターセッションには、さらにContributedとInvitedがあり、Invitedの方は一人5分の口頭での発表時間が与えられます。主会場のロビーに作られたポスター会場には様々なポスターが並び、なかなか壮観です。印刷物そのもののポスター、多くの色を使った派手なもの、小さな紙を鱗のようにべたべた貼り付けたもの、日めくりカレンダーの様に立体になっているもの、論文のコピーを3枚その儘貼っただけの手軽なもの。中でも、初めはてっきりXYプロッターか何かで書いたポスターだと思っていたものが、良くみると実は全て手で精巧に書かれたものだったのには驚きました。

最近ではレーザープリンターがかなり出回っている為か、ポスターにしるアブストラクト集にしる、美しい字体で書かれたものが増えています。如何に美しい字で印刷するかには日頃から腐心している自分としては、アブストラクト等をどうやって書いているのか、興味を持つところです。タイプライターや英文ワープロで書いてドットマトリクスプリンターに出力したものも健在ですが、数式・ギリシャ文字などの特殊文字や色々なフォントを体裁良く混在させて目を引くのはApple社のMacintoshとD.E.Knuth氏による組版システムTeXの2者でしょう。前者は言わずもがなの優れ物で、愛用なさっている方も多いと思います。後者は、日本語化されたソフトがネットワークから比較的簡単に手にはいる事と、大型計算機からパソコンに至るまで機種にとらわれず使用できる事から近年使用者が増えている物です。400dpi程度のレーザープリンターに出力するとどちらも本当に出版物の様に見えるのですが、細かな点で違い(fが2つ続くような場合や引用符等)、どちらで書いたのか見当がつかます。前回の水戸での会議での論文集にも、幾つかこのTeXで書かれたものがありましたが、今回はかなり多くなっているようです。

初日のセッションは6時過ぎまでで、その後、8時頃までレセプションが行われました。その会場でパキスタンのS.M.Saleem氏と名前の事について雑談していましたが、“Saleem”と言うのは、「礼儀正しさ」などを意味する言葉だそうです。ちなみに、“Qaim”と言うのは、はっきりとは説明しにくいけれど、「完全な人」の様な意味だそうです。どなたか、アラビア語の分かる方がおられたら教えて下さい。日本語ではやはり「皆無」でしょう。

2日目は、核融合炉に関連した核データについての招待講演に始まり、午後からは核融合関連の核データのセッションと、スタンダードと崩壊データのセッションに分かれて進行し、その後ポスターセッションBの時間を経て、全てが終了したのはこの5日間で最も遅い7時過ぎでした。3日目は、医学や地質学への応用と中エネルギーに関連したもので、昼過ぎからはポスターセッションCの時間が当てられていました。このセッションでは、私の専門に関するものもあり、色々と資料を物色していました。ポスターセッションが終了したのは5時で、その後、会議参加者はオルガンとソプラノのリサイタル、及びライン川での船上ディナーの催しに参加する為、バスでケルンに向かいました。奥様方の一団とそこで合流して教会でのリサイタルを聞いたまでは良かったのですが、その日は5月とは思えない寒さで、船着き場まで行くバスを待つのが大変でした。同じ様に寒い中、バスを待っていた D.L. Smith氏に、私たちが新婚である事を話すと「なんて寒い新婚旅行なんだ！」のお言葉でした。バスが船着き場に着くと今度は雨。バスの停車した所から船まで約100mを走って、やっと夕食にありつけました。

ケルンからアーヘンに戻ったのが0時。それでも、翌朝の KFA行きのバスは、8:20きっかりにエリーゼンブルーネンを出るのです。

4日目は核理論・評価方法についてのセッションが主で、この会議で私が最も期待していた所です。LANLの P. G. Young氏の光学模型、準位密度、 γ 線強度関数等、データ評価にしばしば用いられる理論の近年の発展についての発表、続いてOxfordの P. E. Hodgson氏による光学模型の分散関係についての発表、この2つは自分の研究にも関連が深く、非常に興味を持って聞きました。特に、P. E. Hodgson氏の著書を私たち研究グループのゼミの教科書にしている事もあり、氏がどのような人物であるか以前から知りたかったのですが、予想に違わず典型的な英国紳士の風格でありました。

午後のポスターセッションDでは、私の発表がある為、その間ポスター前の番をしていなければなりません。どのポスターセッションでも、ポスターの前に当事者が誰も居らず質問したくても出来ないものがありました。自分で言うのも変ですが、私は結構真面目に店番をしていた方で、幾人か興味を持って質問してきた人がありました。初めに来たのは、私のポスターのすぐ近くに開店していたロシア人で、一通り私が説明をした後、自分の方も見てくれと、彼のポスターの説明をしてくれました。そして、「これをあげるから」とプロシーディングスのプリプリントをくれたのですが、これがコピーではなく原稿そのものの。アルファベットだけをプリンターで打った紙に δ や Σ を直筆で書き込んだものでした。こんなもの貰っても良いのかと訝っていたら、「それだけじゃ無いんだ」と封筒から小さな図を数枚取り出し、紙の空白を指さして「これをここに貼ってくれ」。

また、WienのH. Vonach氏の質問に、私が少しくどくどと説明していたら、「YesなのかNoなのか。それだけ答えればいいんだ！」と一喝されてしまいました。私が驚いて「Noで

す」と言うと、「そうか、よし」と言って去って行かれました。(氏はこの会議のアブストラクト集で最も登場回数が多く、9コの発表に関与しておられます。ちなみに、2位は、R. C. Haight (LANL), P. W. Lisowski (LANL), G. Stoecklin (KFA) の3氏で6コです)

最後に来た人は、ポスターを見渡した後、図中のリファレンスにあった R. L. Walter (TUNL) を指さし、「自分はこれだ」と名乗りました。私の所属が九州大学であるのを見て、「What a nabe を知っているか?」と尋ねます。何を言っているのか分からず、聞き返すこと数回、ようやく「Wa-ta-na-be (渡辺)」と言っているのに気づきました。Walter氏はかなり長い間私と話をしていたのですが、ふと、「君はバスで帰らなくて良いのかい?」と聞くので、「えっ?」と辺りを見渡すともう誰もいないではありませんか。「車があるから、私はバスに乗らなくて良いんだ」と氏は泰然としています。慌てたのはこちらの方で、バスに乗らなければ数十kmも離れたアーヘンまで帰る術がありません。急いで荷物を纏めてバスの所へ行くと、もう全員乗り込んで本当に出発寸前でした。

最終日は午前中に幾つかのセッションがあった後、午後から閉会式、3時半に全て終了しアーヘンに戻りました。当初の予定では、最終日はもうアーヘンを発つ心算でしたが、かなりハードなスケジュールで会議が進みましたので予定変更してもう一泊する事にし、近くのスーパーでビールを買ってホテルで打ち上げの乾杯。翌日アーヘンを発った迄は良かったのですが、会議の疲れか、ケルンで雨の中を走ったせいか、次の宿泊地で熱を出し、あと2日寝込む事になりました。

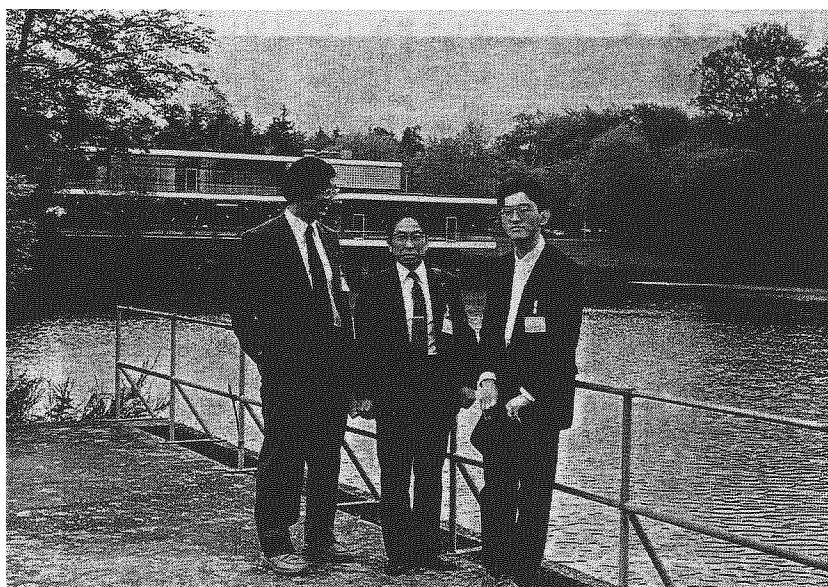


写真1 研究所内の池のほとりにて
(左から前川氏(原研), 神田氏(九大), 筆者)



写真2 公園の様な研究所内風景

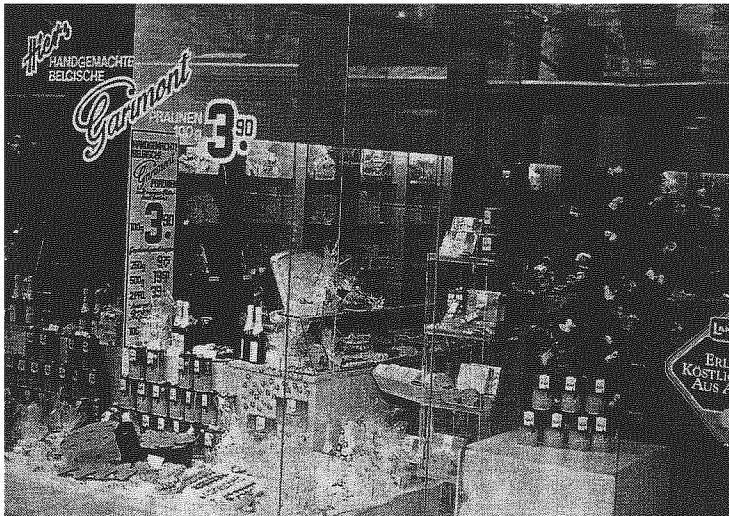


写真3 アーヘンのお菓子屋さん